

■ ユーロ/ドルは「今、まさに正念場」！？

ユーロ/ドルが「今、まさに正念場」と言うにふさわしい状況となっている。

周知のとおり、ユーロ/ドルは昨年9月に一旦1.2093ドルまで上値を伸ばし、その後一旦は1.1550ドル処まで調整したものの、昨年11月半ば以降に再び切り返して先週1/4日には一時1.2089ドルまでの戻りを見ている。昨日(1/10)も一時1.2000ドル台に乗せる場面を垣間見たが、後に1.1940ドル処まで値を沈める展開となった。

やはり、どうしても1.2000ドル前後ではユーロ/ドルの上値が重くなる。それは、1.2000ドル前後のところに複数の重要な節目が集中しているからからであり、目下はこれらの節目をすべてブレイクして上に向かうか、それとも再び押し戻されるかの正念場にある。

複数の節目とは、一つに62週線のことであり、下図に見るように62週線は昨年8月以降ずっとユーロ/ドルの上値を押さえ続けてきている。この62週線が位置するところは、一目均衡表の月足「雲」のなかであり、ゆえに値動きはどうしても重くなりがちである。

また、ユーロ/ドルの1.1800-1.2000ドル処というのは、2015年1月にECBが量的緩和策の実施決定を発表するまで長らく下値を支えていた水準であり、なおも量的緩和策が続けられている状況(少なくとも今年9月までは続く)にあつては、やはり同水準が上値の抵抗として意識されやすい。



まして、2014年5月高値(1.3993ドル)から2017年1月安値(1.0340ドル)までの下げに対する半値戻しが1.2100ドル台に位置しているうえ、2015年3月安値から同年8月高値までの上げ幅を1.382倍して2017年1月安値に加算した一つの目標値も1.2070ドルという水準になる。ここまでくると何だかこじつけのようでもあるが、とにかく1.2000ドル前後の水準というのは、とりあえずの上値の目安として意識されやすくなっているのだ。

それだけに、ひとたび「この水準」をクリアに上抜けると、そこからの上値余地は相応に広がりやすくなるものと見られる。ただし、月足「雲」上限の抵抗はそう簡単に突き破れるものではないということも一応は心得ておきたい。実際、2014年の3～5月も月足「雲」上抜けにトライはしたものの、結局は玉砕することとなった。

逆に、あらためて「この水準」で押し戻された場合には、昨年11/7安値の水準をネックラインとするダブルトップが完成する可能性に要警戒となる。目先は主化後通貨先物取引市場における大口投機家のユーロ買い越しが過去最大規模に膨張していることもあり、やや売りものがちとなりやすいことは事実である。いずれにしても、当面は「この水準」からどちらに振れるか慎重に見定めて行きたい。

(01月11日 10:45)